

原 著

小兒蕁麻疹樣苔癬ニ就テ

金澤醫學專門學校皮膚科教室(主任土肥博士)

森 鍵 次

一、緒 論

本症ハ主トシテ幼弱ノ小兒ニ多キ皮膚病ニシテ、其大部分ハ生後數ヶ月ヨリ一、二年ノ間ニ於テ始マリ蕁麻疹樣ノ紅斑又ハ丘疹數年ニ亘リテ反覆發生スル癢痒性皮膚病ナリ。本症ハ從來ヨリ多クノ學者ニヨリテ種々ノ名稱ノ下ニ報告セラレ屢々混同誤解セラレタル疾病ナリトス。

ハルヂー氏ハ癢痒性ストロフルス(Hardy, Strophulus pruriginosus)ノバザン氏ハ良性蓄狀腺病疹(Bazin, Scrofulide boutonense bénigne)ノトマンリー氏ハ一時性痒疹(Tommasoli, Prurigo temporanea)ノウイバーン氏ハ急性單純性苔癬(Vidal, Lichen simplex acutus)ノハッチンソン氏ハ水痘狀痒疹(Hatchinson, Varicellenprurigo)ノブロンク氏ハ單純性痒疹(Brocq, Prurigo simplex)ナル名稱ヲ附シ、又汎發性苔癬(Lichen général)ノ限局性苔癬(Lichen circumscripte)ノ散在性苔癬(Lichen sparsus)ノ密集性苔癬(Lichen confertus)ノ丘疹狀蕁麻疹(Urticaria papulosa)ノ小兒慢性蕁麻疹

(1)

(2)

(*Urticaria chronica infantum*) 等ノ名稱ニヨリテ多數ノ學者ヨリ發表セラレタリ。然レドモ今日最モ多ク用ヒラルル名稱ハ小兒ストロフルス(*Strophulus infantum*)ト蕁麻疹樣苔癬(*Urticaria urticatus*)ナル名稱ナリトス。

ウィラン、ボーテマン氏等ガ本病ニ見ル小結節ガ比較的水疱化又ハ膿疱化シ難キタメ之ニ苔癬ナル語ヲ用ヒタルニ始マレリ。然レドモヘブラ氏ハ苔癬ナル文字ハ絶對的ニ水疱化膿疱化スルコトナク、再發反覆シテ數年ニ亘ルト雖モ常ニ丘疹ノ型ヲ保持スルモノニ下シタル名稱ナルヲ以テ之ヲ苔癬系統ニ排列スルヲ非トシ、且又一方ヨリ之ヲ觀察スルトキハ其ノ發疹ノ部位其他一般ニ慢性癢痒性皮膚病ナル痒疹ニ酷似スルモ本症ハ多クハ壯年期ニ及ブコトナク、六、七歳ニ至リテ自然の治癒機轉ヲ取ルヲ特徴トシ、タトヘ再發ヲ反覆スルモ痒疹ノ如ク皮膚ノ肥厚、浸潤ヲ來サズ、發疹ノ吸收後時ニハ色素沈着ヲ殘スコトアルモ、輕度ニシテ、淋巴腺腫脹ナク、好發部位ハ必ズシモ四肢ノ伸展側ニ限局セザル等ノ諸點ヨリ見テ、之ヲ痒疹ヨリ特別ノ獨立セル皮膚病トシテ分離スベキヲ當然トナシ、又ヘブラ、カボジノ兩氏ハ之ヲ好發部位及ビ臨牀上ノ見地並ニ時期ニ關係シテ反覆發生スル等ノ諸點ヨリ見テ之ヲ多形滲出性紅斑ノ一種ト看倣セリ。而シテ又カボジ氏ハ滲出性現象ガ昂進シテ原疹ガ皮膚表面ヨリ隆起セル固キ丘疹ヲ作ルトキハ之ヲ丘疹性紅斑トナシ、更ニ増大シテ、蕁麻疹樣トナルトキハ之ニ蕁麻疹樣紅斑或ハ蕁麻疹樣苔癬ナル病名ヲ附與スベキナリト云ヘリ。尙又 Neumann, Riehl, Colecott Fox, Pontoppidan, Gebert, Neisser, Blaschko, Jadassohn, Van der Speck, Tommasoli, Brocq, Jarsisch 等ノ諸家ハ本症ガ痒疹及ビ蕁麻疹ト組織解剖の所見略ボ同様ニシテ、且本症ノ初發當時ニアリテハ普通蕁麻疹ノ如ク卒然發生シ、卒然ニ消散スルモ時ヲ經過スルニ從ヒ、次第ニ長ク存在シ、加フルニ、發疹ハ蕁麻疹ノ如ク扁平ニ皮膚面ニ隆起セズ、却テ半球狀ニ突隆スル等ノ諸點ニ據リ本症ヲ丘疹性蕁麻疹ノ一種ト看倣セリ。

以上ノ如ク諸家ノ所見區々ナルモ、要スルニ、異名同病ナリトス。

今予ハ金澤病院皮膚科が大正二年創立サレテヨリ、大正十年九月末日迄ニ外來ニテ實驗セラレタル本症患者ニ就テ

ノ、統計的觀察ノ結果ヲ報告シ、之ニ東京、九州、大阪ノ各大學、及ビ長崎醫學專門學校ノ各皮膚科教室、並ニ當市金城病院ノ各統計ヲ比較シテ、左記項目ニ別チ記述セントス。

第 一 表

報 告 者	患者數	外來患者總數	百分比%	期 間
東京大學皮膚科	一七五	二二五四四	〇・七七六%	自明治三十二年 至明治三十九年
九州大學皮膚科	二二七	三〇五九七	〇・七四二%	自明治三十九年 至大正四年
金澤醫專皮膚科	九六	一九五九四	〇・四九〇%	自大正四年 至同十年九月
大阪大學皮膚科	一一九	不明	不明	自大正七年 至大正七年
長崎醫專皮膚科	四一	不明	不明	不明
金城病院皮膚科	八	五五三三	〇・一四四%	自明治三十八年 至大正三年

一、本症ト性トノ關係

歐米ノ成書ノ多クハ本症ガ主トシテ女子ヲ冒シ易キ様記載セラレタルガ、余ノ金澤病院皮膚科ノ統計ニヨレバ、新來患者總數一九五九四名ノ内、本症患者九六名ニシテ、其ノ内男子ハ四五名即チ四六・八七%ニ相當シ、女子ハ五一名ニシテ、五三・一三%ヲ得、歐米ノ其レニ稍々一致スルガ如キモ、東京、九州各大學皮膚科教室、並ニ金城病院ノ各統計ニヨレバ各々以上ト反對ノ結果ニシテ、尙又之ヲ綜合スルトキハ、全患者數五〇六名中、男子ハ二七三人即チ五三・九六%、女子ハ二二三名四六・〇四%ニシテ、同様ニ女子ヨリモ男子ニ多キ結果ヲ得タリ。然レドモ其ノ差異タルヤ極メテ僅少ナルヲ以テ、本症ト兩性トノ關係ヲ云々スルヲ得ズ。況ヤ外來患者ノ男女兩性ノ比例ハ概シテ、男性ノ方多キヲ以テ是等ノ數ヲ十分顧慮スルニアラザレバ相互ノ關係ヲ明カニ述べ得ザルハ勿論ナリトス。

第

報 告 者	男 患 者	女 患 者
東京大學皮膚科	數 一〇三	數 七二
	百分比% 五八・八六%	百分比% 四一・一四%

表 二

九州大學皮膚科	一九	五三・四三%	一〇八	四七・五七%
金澤醫專皮膚科	四五	四六・八七%	五一	五三・一三%
金城病院皮膚科	六	七五・〇〇%	二	二五・〇〇%
總計	二七三	五三・九六%	二二三	四六・〇四%

二、本症ト年齢トノ關係

表 三 第

報告者	二ヶ月	五才	六才	一才	一才	一才	三才	以上	各教室患者數	期間
金澤醫專皮膚科	四	六四	二三	二	三	〇	九六	自大正二年	至同十年九月	
東京大學皮膚科	六	五九	一九	一三	四九	三〇	一七六	自大正二年	至同三十九年	
九州大學皮膚科	一一	一〇四	一二	一六	三八	四六	二二七	自大正四年	至同四十年	
長崎醫專皮膚科	〇	三一	四	一	一	四	四一	不	明	
大阪大學皮膚科	三	九〇	二一	三	二	〇	一一九	自大正七年	至同三十八年	
金城病院皮膚科	二	四	一	一	〇	〇	八	自大正八年	至大正二十年	
合計	二六	三五二	八〇	三六	九三	八〇	六六七			

年齢ハ各教室共ニ、滿一歳以上五歳ニ最モ多ク、全患者數、六六七名中三五二名ニシテ、其約大半ヲ占メ、生後一ヶ月ヨリ十二ヶ月ニ於テ割合ニ少ナク二六名ニシテ、六歳乃至一〇歳ニ於テ八〇名ニシテ、一一歳乃至一五歳ニ於テ頓ニ減少セルヲ見タリ。然レドモ茲ニ注意スベキハ本症ガ前述ノ如ク主トシテ幼弱ノ小兒ニ來リ、少ナクモ一〇歳以前ニ於テ自然治癒スルヲ特徴トシ其レ以上ニ及ブモノ極メテ稀ナル如ク成書ニ記載サレ居ルニ拘ラズ、第三表ニ示ス如ク本邦ニ於テハ一一歳以上ニ尙罹患スル者割合ニ多シトス。一六歳以上三〇歳未滿ノモノ九三名ニシテ、三一歳以上ノモノ實ニ八〇名ノ多キニ達セリ。

三、本症ト季節トノ關係

(5)

本症ハ四季何レヲ通ジテモ存在スルモ三月ヨリ九月迄即チ春ヨリ夏ニカケテ多ク就中五、六ノ兩月ニ於テ著シク多キヲ認メ、歐米ノ冬期ニ増加シ夏期ニ消失スルト、全ク反對ノ結果ヲ得タリ。而シテ我敎室ニ於テモ夏期ニ消退シ冬期ニ増悪スルモノハ九六名ノ患者中僅カ四例ヲ實驗セルノミナリ。其ノ原因ノ奈邊ニ存スルヤハ尙將來研究スベキ所ナルモ、青木博士ハ我邦ニ於テハ本症ノ發生期ト消滅期トハ全ク蚤ノ發生期ト消滅期トニ一致スルコト且本症ガ泰西ニ少ナクシテ本邦ニ多キハ疊ヲ使用スルタメ蚤ノ多キニ基因スルヲ注意シ蚤ノ刺咬ト本症發生上、大ナル關係アルヲ述ベラレタリ。吾人モ氏ノ說ニ賛同スル所ナルモ尙本期間ハ蚋、蟻、蚊、其他ノ昆蟲類ノ好シデ發生スル時期ナレバ是等ノ刺咬モ亦本症ニ罹リ易キ素因ヲ有スル者ニ誘因トシテ多少ノ關係ヲ有スルモノニアラザルヤヲ思考セシムル所ナリトス。

第四表 (初診月ト患者數トノ關係)

報告者	初診ノ月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長崎醫專皮膚科		〇	〇	八	一〇	一二	一五	四	〇	〇	一	—	〇
大阪醫大皮膚科		三	四	一七	一三	二三	二八	一三	五	九	四	—	二
金澤醫學皮膚科		三	三	五	九	一九	一八	一四	六	一五	五	—	四
合計		六	七	三〇	三二	五四	六一	三一	一一	一〇	三	六	六

四、本症ノ發病ト年齢及ビ季節トノ關係

第五表

發病セル年齢	患者數	一—二歲	二—三歲	三—四歲	四—五歲	五—六歲	六—七歲	七—八歲	八—九歲	九—一〇歲	一〇—一六歲
患者數		一四	二二	一八	一五	六	四	五	三	一	〇

正確ナル統計の觀察ハ甚ダ困難ナルモ、九六例中略ボ正確ナルモノハ七例ヲ得タリ、其統計ヲ見ルニ生後ヨリ四歲

(6)

迄ニ於テ大部分發病セルヲ知レリ。而シテ發病季節ハ春ニ於テ最モ多ク四五例中二一例、夏期一一例、秋二例、冬一例ヲ得タリ。

五、本症ト住所トノ關係ニ就テハ重要ナル意味ヲ有セザレドモ市部ニ於テハ三三例、郡部ニ於テハ六三例ニシテ、略ボ一對二ノ比ヲ示セリ。

六、職業ハ予ノ統計ニヨレバ農業ノ家族ニ於テ最モ多クシテ九六例中二〇例、之ニ次グモノハ醫師ノ家族ノ八例ニシテ其他千差萬別ニシテ、本症ト職業トノ間ニハ何等特別ノ關係ヲ有セザルモノト信ズ。

七、合併症トシテハ濕疹最モ多ク九六例中一二例ヲ認メタルモ劇甚ナル癩癧ニヨリ絶ヘズ搔爬セララルル割合ニ少ナキノ感アリ、其他膿癧疹ノ七例、汗疹ノ三例、夏期痒疹、毛囊炎、蛆墜症、尋麻疹、尋常性白斑ノ各々一例ヲ得タリ。

八、好發部位ハ痒疹ノ如ク必ズシモ四肢ノ伸展側ニ限局セズシテ頭部、手掌、足蹠ヲ除ク他ノ身體各部何レノ場所ニ於テモ發生ス。

九、遺傳及ビ血族的關係ニ就テ證明シ得タル例ハ案外少ナク家族中ニ同病者アリシハ本患者九六例中僅カニ五例、五二%ニシテ其ノ内一例ハ患兒ノ母ノ幼時罹患セルモノニシテ他ノ四例ハ同胞中ニ同病者アリシモノナリ。

二、症 例

患者 番號	姓 名	住 所	年 齡	職 業	性	初診年月	發病年齡 及ビ季節	病症ノ 増悪期	發病ノ動機 スベキモノ	合 併 症	發生部位	備 考
1	河合	西礪波郡	五歲	醫師	男	二、三	四歲ノ夏	季節ニ 關セズ			下肢伸側	
2	川原	同	十三歲	農	男	二、七	七歲	夏			全身	
3	倉邊	羽咋郡	生後十 ヶ月	農	女	二、九	生後九ヶ月 夏			全身丘疹性 濕疹	全身	
4	延命	鹿島郡	四歲	農	男	二、七	三歲ノ秋		胃腸障害		全身	

(7)

原著 森小兒毒麻疹療養辭二就テ

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	
東堂	刀禰	辻	多賀	林(正)	林(三)	南	藤田	川島	長谷川	吉野	佐藤	野上	中田	中澤	成緒	白尾	山淵	森田	松井	松本	松田	大西	大村	大石	
中新川郡	珠洲郡	同	坂井郡	同	西礪波郡	金澤市	河北郡	西礪波郡	東礪波郡	同	同	金澤市	河北郡	坂井郡	同	金澤市	中新川郡	金澤市	中新川郡	金澤市	河北郡	石川郡	同	金澤市	
四歳	九歳	三歳	三歳	三歳	四歳	五歳	三歳	四歳	五歳	六歳	八歳	三歳	七歳	四歳	三歳	六歳	五歳	五歳	三歳	三歳	三歳	五歳	二歳	三歳	
賣藥	無	無	無	無	農	無	飲食店	無	農	無	礦山師	員鐵道職	農	土木業	無	無	農	無	農	硝子商	農	農	無	無	
男	女	男	女	男	女	女	女	男	女	女	女	男	女	女	女	男	男	女	男	男	女	女	女	女	
五、五	四、一〇	四、六	四、九	四、六	四、六	四、一〇	四、八	四、五	三、七	三、三	二、九	二、六	二、八	二、七	二、六	二、四	二、九	二、六	二、一〇	二、六	二、六	二、九	二、四	二、八	
四歳ノ春	幼時ヨリ	三歳ノ春	月ヨリ	生後十ヶ月ヨリ	三歳ノ春	四歳ノ春	不明	三歳ノ春	五歳ノ春	二歳	八歳ノ夏	二歳ノ夏	四歳	三歳ノ春	二歳ノ夏	六歳ノ春	五歳ノ春	四歳ノ春	二歳ヨリ	月ノ春ヨリ	生後十ヶ月ノ春ヨリ	三歳ノ夏	不明	幼少ヨリ	生後二週ヨリ
春	夏	春	夏			季節ラズ	夏	夏	夏	冬	夏	春	夏	春	夏						夏		春	夏	
麻疹後												麻疹													
急性濕疹												結痂性濕疹													
全身	全身	軀幹	四肢	全身	全身	全身	全身	全身	軀幹	軀幹	全身	腹、四肢	背、腹、腰	腹、上腿内側	全身	鼠蹊部	胸部上腿	全身	軀幹四肢	軀幹	胸部臀部	全身	全身	腹、四肢	
生來全身癢痒アルモ 皮疹ハ麻疹後發生ス 母ハ疥癬												過敏症ニシテ時々癩 癰ノ發作アリ													
姉弟ナリ												腺病性體質ナリ 蚤蚊ノ咬刺ニヨリテ 發生セリト													

番 號	姓 名	住 所	年 齡	職 業	性	初 診 年 月	發 病 年 齡	病 症 期	發 病 ノ 動 機	合 併 症	發 生 部 位	備 考
52	佐藤	鳳至郡	三歲	無	男	八、五	三歲ノ春			性膿狀球菌	左上肢	
51	堀井	婦貢郡	三歲	醫師	男	八、二	三歲ノ冬			連鎖狀球菌	全身	
50	保科	大野郡	七歲	農	女	八、七	不明			全身	全身	
49	藤井	石川郡	五歲	教員	男	八、六	五歲ノ夏			全身	全身	
48	藤田	鹿島郡	四歲	貸座敷	女	八、六	三歲ノ春			全身	全身	生來ヨリ感冒ニ罹リ
47	波々伯	鹿島郡	五歲	醫師	男	八、六	生後ヨリ			汗疹	全身	
46	春木	金澤市	十ヶ月	魚商	男	八、五	生後九ヶ月ノ春			汗疹	全身	
45	横山	金澤市	五歲	無	男	八、四	五歲ノ春			全身	全身	
44	山下	金澤市	五歲	教師	男	八、六	五歲ノ春			全身	全身	
43	宮田	能美郡	二歲	農	女	七、一〇	二歲ノ春			種痘後	軀幹	
42	山本	高岡市	四歲	賣藥業	男	七、五	四歲ノ春			種痘後	軀幹	
41	野村	金澤市	三歲	塗師屋	男	七、六	二歲ノ夏			種痘後	上腿軀幹	
40	長井	西礪波郡	五歲	農	女	七、二	四歲	夏		性膿狀球菌	四肢	當時百日咳ニ罹リ
39	長澤	同	三歲	羽二重系	女	七、七	生後數ヶ月ヨリ	夏		結痂性濕疹	全身	
38	松扇	同	三歲	無	男	七、四	二歲ノ春			結痂性濕疹	腰腹部	
37	遠藤	金澤市	二歲	無	女	七、五	不明			濕疹	腰腹部	
36	谷	河北郡	六歲	教師	女	七、八	六歲ノ夏	夏		性膿狀球菌	腰腹部	
35	時國	鳳至郡	五歲	醫師	男	六、五	四歲ノ夏	夏		連鎖狀球菌	全身	
34	大屋	石川郡	六歲	賣煙草販	男	六、五	四歲	夏		全身	全身	
33	結城	射水郡	九歲	酒釀造	女	五、五	二歲	春秋		氣管支加答兒ヲ有ス	軀幹	生來ヨリ全身ニ癩癧アリシモ皮膚疹ヲ見ズ
32	福光	同	三歲	酒釀造	女	五、六	生後ヨリ	關セズ		全身	全身	
31	大石	同	五歲	無	女	五、三	二歲	夏		全身	全身	
30	石坂	金澤市	三歲	醫師	男	五、七	生後ヨリ	夏		軀幹上腿	軀幹上腿	

一九

番 號	患 者	姓 名	住 所	年 齡	家 長ノ 職 業	性	初 診 年 月	發 病 年 齡 及 季 節	病 症 ノ 増 悪 期	發 病 ノ ス ベ キ モ ト	合 併 症	發 生 部 位	備 考
96	白江	能美郡	五歲	醬油	男	一〇、二	夏	夏				軀幹下肢	
95	辻	鹿島郡	三歲	農	女	一〇、六	夏	夏				全身	
94	福田	西礪波郡	六歲	薪炭商	女	一〇、四	夏	夏				全身	
93	野崎	射水郡	七歲	農	女	一〇、五	夏	夏				全身	
92	堀野	氷見郡	九歲	農業海產物	男	一〇、五	夏	夏				全身	
91	吉田	礪波郡	三歲	農	女	一〇、五	夏	夏				腰腹下肢	
90	尾崎	大野郡	二歲	船會社	男	一〇、六	夏	夏				上肢	
89	厚地	金澤市	八歲	料理業	女	一〇、五	夏	夏				肛圍	
88	川	能美郡	三歲	無	女	一〇、二	夏	夏				全身	
87	高柳	同	七歲	無	男	一〇、五	夏	夏				全身	
86	松井	同	八歲	無	男	一〇、八	夏	夏				軀幹	
85	石田	金澤市	七歲	會社員	男	一〇、八	夏	夏				全身	神經衰弱症ニ罹リ 患者ノ弟モ麻疹後同 様ノ皮膚疾患ニ罹リ
84	伊藤	射水郡	七歲	農	男	一〇、六	夏	夏				全身	當時氣管支炎ニ罹リ
83	西島	坂井郡	三歲	機業	女	九、九	夏	夏				腹、四肢	
82	長田	富山市	三歲	菓子商	男	九、四	夏	夏				胸、四肢	
81	中西	金澤市	三歲	軍人	男	九、一〇	夏	夏				下肢伸側	
80	鍋島	富山市	三歲	金物商	男	九、七	夏	夏				下肢	
79	永國	金澤市	四歲	軍人	女	九、六	冬	春				全身	肺炎加答兒面皰、氣 管支炎ニ罹リ、ロ氏 反應陰性
78	源通	東礪波郡	二二歲	農	男	九、六	冬	春				軀幹四肢	

三、症候及經過

發疹ハ粟粒大乃至小麻實大ノ淡赤色又ハ淡黃色ノ小結節ニシテ、時ニハ集簇シテ恰モ苔癬狀ヲ呈スルコトアルモ、

多クハ四肢、軀幹、臀部等ニ散在性ニ發生シ劇甚ナル癢痒ノタメニ往々搔爬セラレテ血痂ヲ作り、稀ニハ其ノ先端ニ小水疱又ハ小膿疱ヲ備フルコトアリ。

該小結節ハ皮膚面ヨリ隆起シ、時ニハ眞珠樣光澤ヲ呈スルコトアリ。周圍ニハ淡紅色或ハ鮮紅色ノ外暈ヲ備ヘ各疹ノ消退セントスルヤ先ヅ紅暈ニ始マリ、數日ヲ出デズシテ、小結節モ吸收セラレ、全ク痕跡ヲ止メザルコトアリ。時ニハ痒疹ノ如ク一時輕度ノ色素沈着、搔爬痕跡又ハ小癬痕ヲ遺殘シテ消散スレドモ、新發疹ヲ逐次續發シ、或ハ一旦治スルモ亦再發シテ數週乃至數月ニ及ビ容易ニ治ニ就カズ、然レドモ皮膚ノ續發的變化ハ一般ニ輕度ニシテ、頻々再發スルモ皮膚ノ肥厚ナク柔軟ニシテ淋巴腺腫脹ナシ。癢痒ノ劇甚ナルタメ絶ヘズ搔爬セラルルモ其割合ニ濕疹、膿痂疹、癰腫等ノ合併症少ナキハ本症ノ特徴ナリ。而シテ癢痒ハ晝間ヨリモ夜間ニ於テ甚ダシク、快晴ノ日ヨリモ濕氣多キ曇天ノ日ニ於テ劇甚ナリトス。

全身狀態ハ冒サルルモ輕微ニシテ發熱ナキモ、重症ナルモノニ於テハ夜間ニ増惡スル癢痒ノタメニ、屢々安眠ヲ奪ハレ啼泣シ精神過敏トナリテ、食慾不振ヲ來シ、一般榮養害セラルルコト無キニシモアラズ。然レドモ輕症ニアリテハ丘疹少ナクシテ却テ尋麻疹樣紅斑ヲ主トシテ發生シ、全身狀態ニハ殆ド何等ノ影響ヲ及サズ。斯クノ如クシテ本症ノ發生後ハ多クハ年々季節ニ關係シテ再發ヲ反覆スルモ、通例ハ五、六歳ニ至リテ自然的治癒ヲ取ルヲ常トシ、稀ニハ本症ヨリ痒疹ニ移行スルコトアリ。

四、原 因

多クノ學者ハ尋麻疹及ビ痒疹ノ原因ノ總テヲ、本症ノ原因ト認メ、其本體ニ至リテハ前二者ト同ジク今日尙不明ナリ。

ブラシコ氏ハ輕度ノ刺戟ニヨリテ種々ノ局所性炎症性機轉ヲ呈スル一種ノ皮膚血管病ナリト定義セリ。而シテ多ク

ノ學者ハ皮膚血管ノ異常刺戟狀態ノ原因トシテ或ル種ノ毒素並ニ特有ノ自家中毒素ノ影響ヲ舉タリ。尙古來ヨリ本症發生ノ原因トシテ、齒牙發生、貧血、遺傳微毒、胃腸障礙、腺病、榮養過度、佝僂病等ヲ舉ゲタリ。就中齒牙發生ハ偶々本症ノ發生時期ニ相當スルノミニシテ、何等直接ノ原因ノ關係ヲ有スルモノニアラザルベシ。土肥博士ハ其ノ著書皮膚科學上卷ニ於テ貧血者モ肥滿者モ同ジク病ミ少シモ其患者ノ榮養ニ關セズト云ハレタリ。スビートホーフ氏ハ尿検査特ニ、「インヂカン」及ビ尿酸酵素ノ検査ノ傍ラ、皮膚疾患ノ大部分ニ胃腸ノ機能ヲ化學的方面ヨリ檢シ、本症患者ノ一一名中八名ノ胃腸障礙アリシコトヲ認メタリ。然レドモ是等ヲ以テ直接ノ原因トシテハ吾人ノ首肯シ能ハザル所ナリ。

要スルニ本病ニ罹患シ易キ素因、所謂、ブラシコ氏ノ皮膚血管病ナルモノアリテ之ニ後述ノ内外ノ誘因加ハリテ本症ヲ發生スルモノノ如シ。而シテ此素因ナルモノハ、先天的及ビ後天的ニ來リ得ベキモノニシテ、前者ハ往々同一家族ニ於テ同胞相次テ罹患シ、母子共ニ冒サルルコトニヨリテ説明シ得ベシ。而シテ後者トシテハ、胃腸障礙、麻疹、「マラリア」、其他ノ傳染病、或ハ神經病ノ經過後、前述ノ素因ヲ得ルコト少ナカラズ、予モ九十六例中、麻疹後發病セルモノ一五例即チ一五・六二%、肺炎、胃腸障礙、「デフテリー」、種痘後發生セルモノ各一例ヅツヲ證明シ得タリ。而シテ内外ノ誘因トシテ數フベキモノ非常ニ多ク、外因トシテハ蚤、蚊、蚋、虱、蟻等ノ咬刺又ハ特種ノ植物ノ接觸等ニシテ、冷熱等ノ理學的刺戟ニヨリテモ亦本症ヲ誘發スルコトアリ。

内因ノ關係トシテハ或ル特種ノ食品ガ尋麻疹發生上至大ノ關係アルハ、從來ヨリ周ク認ムル所ナルモ本症ノ如キハ乳汁ヲ主食トスル時期ニ最も多ク發病スルヲ以テ其原因ヲ食物ノ關係ニノミ需ムルコト能ハザルベシ。又之ヲ乳汁ノ性狀ニ求ムルニ、人工榮養ニ依ルコト多キ歐米ニ少ナク、母乳又ハ乳母ノ乳汁ニ哺育セラルルコト多キ本邦ニ多數ナルヲ以テ見ルニ西人ノ罪ヲ牛乳ニ歸スルノ當ラザルヤ知ルベキナリ。

尙又之ヲ生活狀態ヨリ考フルニ歐米ニ於テハ、比較的衛生狀態完備セル上流ニ稀ニシテ下層社會ニ多キ樣記載セラ

五、組織解剖的所見

六診斷

二、發生部位ハ手掌、足蹠、顔面、頭部ヲ除ク身體ノ隨所ニ散在性ニ而モ相對的ニ發生ス。

三、劇甚ナル癢痒感ニシテ殊ニ夜間ニ増劇ス。

四、季節ハ本邦ニ於テハ春ヨリ夏ニ亘リテ最も多ク、而モ季節ニ關シテ消長アリ。

五、年齡ハ生後數ヶ月ヨリ一、二歳ノ間ニ發病シ五、六歳ニシテ自然ニ治癒ス。

鑑別診斷。

一、痒疹ハ特異ノ痒疹性小結節アリ、皮膚ノ浸潤、肥厚甚シク、淋巴腺、殊ニ股腺ノ腫脹ヲ來タシ、色素沈着モ甚シク、必ズ四肢殊ニ下腿ノ伸展側ヲ冒シ壯年ニ至ルモ治セズ。

二、蕁麻疹ハ發生部位不定ニシテ、皮膚面ヨリ扁平ニ隆起シ周圍トノ境界明カニシテ發生、消散速カナリ。

三、疥癬ハ主トシテ四肢屈側面、指間、腹部ヲ冒シ、年齢、季節ニ關係ナク治療ニヨリテ容易ニ治癒シ特異ノ蟲道アリ。

四、水痘ハ發熱ト共ニ瓜核大ノ紅斑ヲ生ジ、數時間乃至一日ニシテ水泡ヲ形成シ破レテ黃色乃至黑褐色ノ痂皮ヲ作り、經過ハ極メテ速カニシテ癢痒ハ輕微ナリ。

七、豫 後

佳良ナルモ直チニ根治セシムルハ困難ナリ、然レドモ五、六歳ニ達スルトキハ漸次發病セザルニ至ルヲ常トス。時ニハ痒疹ニ移行スルコトアリ。

八、療 法

衣類ハ常ニ清潔柔軟輕裝ナルモノヲ用ヒ特ニ寢室ノ換氣ニ注意シ、勉メテ、蚤、蚋、蚊、蟻、虱等ノ侵襲咬刺ヲ防グト同時ニ其ノ撲滅ヲ計ラザルベカラズ。特ニ夜間睡眠時ハ輕裝ナル寢衣ヲ用ヒ寢具ノ如キハ毛布、「フランネル」、獸革皮等ヲ用ヒザル様注意スベキナリ。是等ハ皆其刺戟ニヨリテ癢痒感ヲ増惡セシムルガ故ナリ。而シテ發疹ノ時期ニ温泉ニ轉地セシムルハ好影響アリ、殊ニ硫黄泉ヲ選ブヲ可トス、海濱ノ轉地ハ時ニ鹽分ヲ含ム空氣ノ爲メニ却テ發病ヲ促スコトアリ。

内服注射療法。原因ガ胃腸障礙ニアルトキハ腸管ノ腐敗、醱酵ヲ制スル目的ニハ、「ザロール」、「メントール」、「次硝酸蒼鉛」、「ナフタリン」、「サルチル酸蒼鉛」、「クレヲソート」、「チモール」、石炭酸丸等ヲ内服シ便秘アルモノニハ、「ヒマシ油」、甘汞、人工カルルス泉鹽、精製硫黄、複方甘草散等ヲ用ヒ便通ノ整調ヲ計ルベシ。鎮靜劑トシテハ臭

素劑、(臭素加里、臭素ナトリウム)、「ブロムラル」、「アンチピリン」、楊曹、「ザロフェナセチン」、等用ヒラル。腺病、佝僂病、貧血ノ小兒ニハ砒素、磷、肝油、鐵並ニ其製劑ヲ用フ。就中砒素ハ有効ニシテ或ハ丸劑トシ、或ハ法列兒水トシテ内服セシメ、又ハ亞砒酸曹達水トシテ注射セラル。其他、「アトロピン」、「ピロカルピン」ハ内服及ビ注射トシテ用ヒラル、ジモン氏ニヨレバ、「ピロカルピン」ノ一%溶液ヲ小兒ニ五分ノ一乃至二分ノ一筒、毎日注射シテ二十回ニ及ビ癢痒甚シク緩解セリト。「クロルカルチュウム」モ亦用ヒテ可ナリ。モンチ氏ハ以上ノ「カロメル」、「イヒチオール」、「アンチピリン」、「カルルス泉鹽」等ノ内服ニ用フルヲ寧ろ害アルモ効ナキモノトシ只食鹽水ノ灌腸ノミヲ稱揚セリ、又近時ニ至リ生理的食鹽水(〇・六一〇・八五)ノ靜脈内注射ガ本症ニ有効ナルコト報告セラレタリ。例之、青木博士ハ二例ノ年長ノ小兒ニ隔日又ハ數日隔テ、十數回行ヒ(五〇〇・〇)著シク癢痒ノ輕快セルヲ認メラレ、數回ノ後ニハ發疹全ク消失セルコトヲ報告セラレタリ。

食餌療法。榮養過度ニ基因スルモノハ乳汁ノ飲量ヲ多少減少セシムルヲ可トス。先ニフインケルスタイン氏ハ體質異常ノ際ニ皮膚刺戟狀態ヲ保持セシムルモノハ乳汁中ノ鹽分ナルベシトノ見地ヨリシテ凝乳ヲ去リ之ニ燕麥粥及ビ糖ヲ加ヘ小兒ノ濕疹ニ用ヒテ良結果ヲ得シコトヲ報告セシヨリ、之ヲスビトホーフ氏モ亦七ヶ月ヨリ三歲迄ノ五人ノ本症患者ニ用ヒ有効ナリシヲ説キ、レスネ氏ハ脫脂乳ヲ用ヒテ良効ヲ收メタリト云フ。

局所療法。劇甚ナル癢痒ヲ制シ異常ノ皮膚刺戟ヲ減少シ幾分タリトモ發疹ノ發生ヲ防止スル目的ノタメニ從來ヨリ種々ノ藥劑用ヒラル、即チ「サルチル酸、石炭酸」、「メントール」、「カンフル」、「チモール」、「ナフトール」、「テール」、「硫黃」等ニシテ或ハ酒精劑トシ或ハ軟膏トシテ用ヒラル。

酒精劑ハ使用極メテ單簡ニシテ清潔ナレバ特ニ夏期ニ於テハ患者ノ喜ブ所ナルモ其作用僅ニ一時性ナルノ不利アリ、吾人ハ急速ノ乾燥ヲ防グタメニ蓖麻子油或ハ「グリセリン」、ヲ十%ノ割合ニ混ジテ使用ス。本症ニ軟膏ハ歐米ニ於テ多ク使用セラルルモ本邦ニ於テハ本症ノ大部分ガ夏期ニ於テ發生スル關係上寧ろ、「リニメント」トシテ使用スル

(16)
ヲ便宜ナリトス。

處方

トラガカントゴム

三・〇

グリセリン

三・〇

水

一〇〇・〇

之ニ亞鉛華ヲ一〇%、石炭酸ヲ二%ノ割ニ加ヘ癩癬部ニ塗布ス。本劑ハ初メハ糊狀ヲ呈スルモ塗擦後速カニ乾燥シ衣類等ヲ汚染スルコトナク、患者ニ清涼ノ感ヲ與ヘ其使用法モ極メテ簡單ニシテ手ニテ塗布シ乾燥後ニハ普通ノ軟膏ノ如ク綿帶ヲ要セズ、温湯又ハ水ヲ脱脂綿ニ浸シ輕ク拭フコトニヨリテ容易ニ除去シ得ルノ特徴アリ。
重症ニ於テハ就眠前、「ナフトール軟膏ヲ使用シテ可ナリ。

處方

ベタナフトール

〇・五—一・〇

滑石

四・〇

加里石鹼

一〇・〇

豚脂

二五・〇

青木博士ハ次ノ處方ヲ用ヒ偉効ヲ奏セラレタリト云フ。

處方

酸化亞鉛

二〇・〇

澱粉

二〇・〇

純日本酒

六〇・〇

メントール

二・〇

カルボール

一・〇

藥浴。

ハ一般ニ有効ニシテ「タンニン」(一浴、一〇〇瓦)、曹達(二〇〇瓦)、ブレミンクス氏液(二〇〇瓦)、白陶土(三〇〇瓦)、「リゾール」(五—一〇瓦)、硫黃(硫肝、一〇〇瓦)等ヲ温浴トシテ用ヒラル。

糠浴ノ本症ニ對シ殊ニ卓効アリト推奨セラレタルハ土肥恩師ナリトス(治療新報第三〇七號參照)。入浴ハ夜間就眠

前ニ行ハシメ一浴ニ糠五合或ハ一升ヲ使用ス、糠ハ豫メ「ホウロク」ニテ焙リ袋ニ入レ浴湯中ニ投ジ約十五分乃至半時
間入浴セシム、浴後ハ癢痒殆ド消退シ始メテ安眠スルコトヲ得、連日之ヲ施行スルヲ可トス。

理學的療法。

本症ニ用ヒラルル主ナルモノハ水銀石英燈、人工太陽、電光浴、「ウビオール燈」等ナリ、土肥恩師ハ
高度ノ本症患者ニ水銀石英燈ヲ使用シ効アリシヲ報告セラレ、其後土肥、藤谷兩氏ハ人工太陽ヲ本症ニ使用シ其効力
ハ「ウビオール燈」ニ幾十倍シ又水銀石英燈ニモ優ルヲ報告セラレタリ。

血清療法。

リンゼル、ホイク氏等ハ本症ニ健人血清ヲ、ルックス氏ハ自家血清ヲ土肥恩師、永井氏モ亦自家血清
ヲ青木氏ハ患兒ノ母ノ血清ヲ注射シテ好影響アルヲ認メラレタリ。

九、總 括

以上記載スル處ヲ概括スレバ左ノ如シ。

一、大正二年ヨリ大正十年九月迄ノ間ノ我教室ノ外來患者總數ハ一九五九四名ニシテ其内本症患者ハ九六名即チ
〇・四九〇％ノ割合ニ當リ相當多キ疾患ノ一ニ屬ス。而シテ之ニ東京、九州、大阪ノ各大學、長崎醫學專門學校ノ皮膚
科教室並ニ金澤市金城病院ノ各統計ヲ合算シテ六六七名ノ本症患者ヲ得タリ。

二、男女性ノ關係ニ付テハ九六名ノ内男子四五名、女子五一一名ニシテ歐米ニ於ケルト同様ノ結果ヲ得タルモ之ニ東
京、九州ノ各大學及ビ金城病院ノ患者數ヲ綜合スルトキハ本症患者五〇六名ノ内男子二七三名、五三九六％ニシテ女
子ハ二三三名即チ四六・〇四％ニ當リ女子ヨリモ男子ニ多キ結果ヲ得タリ、然レドモ男女兩性ノ正確ナル比例ニ至リテ
ハ之ニ兩性ノ外來患者數ノ比例ヲ十分顧慮シテ始メテ得ラルベキモノナレバ單ニ以上ノ成績ヲ以テ男女兩性相互ノ關
係ヲ明カニスル能ハザルヤ勿論ナリ。

三、年齡的關係ハ我教室ノミナラズ東京、九州、大阪ノ各大學、長崎醫專並ニ金城病院ノ統計ハ共ニ一歳以上五歳

以下ニ於テ最モ多ク全患者數六六七名中三五二名即チ五二七七%ヲ得タリ。然レドモ一一歳以上ニ於テ尙本症ニ罹患セルモノ實ニ二〇九名三一・二〇%ノ多キニ達セルヲ知レリ。

四、本症ト季節トノ關係ニ付テハ大阪醫大、長崎醫專、並ニ我教室ヲ合算シテ患者數二五六名ヲ得、其内六月ニ於テ最モ多ク六一名、之ニ次グモノハ五月ノ五四名ニシテ、四月、七月、三月、九月、十月ノ順ニ漸次減少シ、十一月ニ於テ最モ少ナシ。

五、合併症ハ九六例中濕疹一二例、膿痂疹七例、汗疹三例等重ナルモノニシテ、搔爬セララルル割合ニ濕疹ノ合併スルコト少ナキノ感アリ。

六、家族中ニ同病者ヲ證明シ得タルモノハ九六例中五例ニシテ僅カニ五・二%ナリ。

七、九六例中一五例即チ一五・六%ハ麻疹後ニ於テ續發セシモノナリ。

八、糠浴ハ本症ニ對シ卓効ヲ奏シ材料ヲ得ルニ極メテ容易ニシテ加フルニ其使用法ノ便利ナル點ヨリ最モ推奨スベキ療法ナリト信ズ。

擲筆スルニ當リ本問題ノ調査報告ヲ命ゼラレ終始懇篤ナル御指導ヲ賜リタル恩師土肥先生ニ深謝ス。

参 考 書 目

- 1) 栗田章司、東大皮膚科外來患者統計、皮膚科泌尿器科雜誌、第三卷、第六號。
- 2) 西川、齋藤、同上、第七卷、第二號。
- 3) 土肥慶藏、同上、第十卷、七、八、九號。
- 4) 同上、水銀石英燈ノ説明、同上、第十一卷。
- 5) 土肥章司、水銀石英燈療法ノ追加、同上、第十三卷、第九號。
- 6) 淺田、大森、吉村、栗崎、九州大學皮膚科外來患者統計、我教室ノ新藥ト七年。
- 7) 佐谷有吉、癩痒性皮膚病ニ對スル二三藥劑ノ治驗、皮膚科泌尿器科雜誌、第十四卷、第三號。
- 8) 三戸雄輔、癩痒ノ療法殊ニ食鹽水靜脈内注入療法ニ就テ、同上、第十五卷、第二號。
- 9) 遠山郁三、小兒期ニ於ケル主要ナル皮膚病、日本小兒科叢書、第九篇。
- 10) 關川、原、藤本、納富、占部、九州大學皮膚科外來患者統計、開講ト十週年。
- 11) 山田孝太郎、金澤市私立金城病院皮膚科花柳病科新來患者統計、土肥教授大學卒業祝賀論文集。
- 12) 柳原英、潰瘍性毒癩疹樣疹患者供覽、皮膚科泌尿器科雜誌、第十七卷、第八號。
- 13) 百瀬玄漢、自家血清療法ニ就テ、同上、第十八卷、第七號。
- 14) 青木

- 大勇、小兒蕁麻疹樣苦癢、原因及療法、臨床醫學第六年、第十一號。
- 15) 土肥慶藏、皮膚科學、上卷。
- 16) 山田、旭、兩氏、皮膚病診斷及治療法。
- 17) 森田、田中、小出、金澤病院皮膚科新來患者統計、十全會雜誌、第二十三卷、第十號。
- 18) 青木大勇、蕁麻疹樣苦癢ノ原因及療法、皮膚科泌尿器科雜誌、第二十卷、第二號。
- 19) 土肥章司、血清療法、同上、第二十卷、第八號。
- 20) 同上、小兒期ニ好發ナル二種ノ痒痒性皮膚病及其療法、治療新報、第三〇七號。
- 21) Unna, Histopathologie der Hautkrankheiten, 1894.
- 22) Jarisch, Die Hautkrankheiten, S. 106, 160, 183, 190.
- 23) Mráček, Handbuch der Hautkrankheiten, Bd. 2, S. 712-717, 1905.
- 24) Ullmann, Physikalische Therapie der Hautkrankheiten, S. 135, 1908.
- 25) Spiethoff, Beitrag zu den bei dem Pruritus, dem Erythema und der Urticaria vorkommenden inneren Störungen, mit besonderer Berücksichtigung des Gastrointestinalkanals, Archiv. f. Dermat. u. Syph. Bd. 90, S. 180, 1908.
- 26) Spiethoff, Erfahrung mit der Finkelscheinschen salzsauren Kost beim Säuglingseczem, dem Strophulus und dem Pruritus infantum, (D. m. W. No. 27, 1908.) 抄録、皮膚科泌尿器科雜誌、第八卷、第五、六號。
- 27) Joseph, Hautkrankheiten, S. 306, 1910.
- 28) Mucha, Über Urticaria chronica papulosa, Iconographia dermatologica, Vol. 1, S. 159, 1910.
- 29) Stelwagon, Disease of the skin, P. 1141, 1916.
- 30) Riecke, Lehrbuch der Haut- und Geschlechtskrankheiten, S. 248, 1921.